# 軍法侍用集 三

備中

ヤ5
487
3
国文学研究資料館

# 侍用集巻第三目録（もくろく）

## 備勝負巻中（そなへしやうぶのまきのなか）

一 軍（いくさ）に二川の心得（こゝろゑ）と云（いふ）事
二 鉄炮頭（てつぽうがしら）心懸（こゝろがけ）之事
三 弓頭（ゆみがしら）心懸之事
四 馬験（うまじるし）之事
五 歩頭（かちがしら）之事
六 竊盗頭（しのびがしら）之事
七 武者奉行（むしやぶぎやう）軍者（ぐんしや）可ㇾ合ㇾ心（こゝろをあはすべき）事

エカ

八　鳴物の事
九　臣下心懸の事
十　艶武者の鑑の事
十一　行〻別の事
十二　貪首沙汰の事
十三　悪敷功者之事
十四　勇者の事
十五　父子首を論ずる事
十六　あとつけの徳を述る事
十七　武運の消長を知る事
十八　うけ軍の事
十九　首主君心懸の事
二十　首実検次第の事
二十一　ちま沙汰の事
二十二　一首の事
二十三　面を作首の事　付り首洗の事
二十四　子細ある首の事
二十五　首の見るかけやうの事

二十六　首すへ布之事
二十七　左ある首之事
二十八　母衣武者討る時之事
二十九　敵の具足大将の目に具る事
三十　敵の弓は首にうけやうの事
三十一　敵の團旗にめまうけ座の事
三十二　敵の幕旗取る時之事
三十三　討捕る敵の死骸を送る事
三十四　首請取渡之事
三十五　首桶寸方之事
三十六　首すへ布寸方之事
三十七　首捨る方之事
三十八　首に札付様之事
三十九　首帳書様之事
四十　味方過去帳書様之事
四十一　手負之帳書様之事
四十二　敵の馬に縁之時之事
四十三　感状書様之事

四十四 軍(いくさ)して大将(たいしやう)ハ物見(ものみ)招(まね)くる事

四十五 敵(てき)味方(みかた)云葉遣(ことばつかひ)之事

四十六 武者(むしや)心を任し事

四十七 勇(ゆう)をこのむ人之事

四十八 仕寄(しより)之時金座(きんざ)を招(まね)くと云事

四十九 仕寄(しより)ハ藁薦(こもの)を着(き)る事

五十 指物(さしもの)竿(さを)之事

五十一 武具(ぶぐ)ハ心得(こゝろゑ)ある事

五十二 軍士(ぐんし)可用(もちゆべき)薬(くすり)之事

五十三 川渡(かはごえ)りの事

五十四 馬(むま)息(いき)をしる時之事

五十五 志のびかまりの入る時之事

五十六 火事(くハじ)之時之事

五十七 寝巻(ねまき)こしらへやうの事

五十八 陣小屋(ぢんごや)圍(かこひ)ぬ之事

五十九 鏡(かゞみ)を可持(もつべき)事

六十 夜(よる)の眠(ねむり)之事

# 侍用集巻之第三

## 備勝負巻之中

### 第一軍に二河の心得と云事

一軍にハ二河の心得あり貴をハ儀を以恥しめ理を以てうけ賤をハ欲を以てひけ。偽を以てうつべき也。其儀味方を下知し敵をうち。大将をいさめ。士卒を制し。或ハ国を治め。或ハ謀計策遠るよ是を志をもすれ。まさハ南花此云義を伝ぞて。両和教命と云軍書を作給ひ。必敵味方上下の戦ハ。あひ引よするべし。碁の詰をうちたるのかはりなり

### 第二鉄炮頭心得之事

一鉄炮頭の志ハ。先下郎を下知するの事大方にかはり給てハ

国文学研究資料館

後ろ〳〵。勲功の敵近陣へ向ひても又ハ拙げに届さる也。或ハ弓勢をいたし。又制道にあらされハ。備を乱すもの。或ハ進時にハたゞされハ味方めてちのまきハ。さきだち崩る也。或ハ又ハ而てききれハ強き分頭の志に随べき也。若百の内五十人もたとひ百人なりとも。惣に佐法によきりの行りとも手ぶりを力んざるうちハ。悪かるんとおもふて。下知あるべし。又百人の中ら臆病の族ありとも。侍ハ武かるんと心得下知すべし。されバ左の古人猪乃習ろく。いはまの物頭も可准之者也。細目身乃心懸ハいよ下まて。一方をうち届ぶりかゝさ敵をうちとめさせ。或ハ味方指を清きゝくるをとふせぎ。或ハ敵の心にくる方をとりて。或ハ人に先ん立付きて仕寄を清く備る事ハ。鉄炮頭の覚悟なり

## 第三 弓頭心懸之事

一弓頭の心得大方鉄炮と同前なるべし。味方引立。是を留め為。或ハ軍者。備をうちまじへてうくる時。乗廻し。命をたすけ下知し進。敵を防ふせ。或ハ物見をさし越。敵の行をとめて。或ハ出張る敵をも追払てかゝりけるハ。鉄炮頭弓頭の働いさぎよくやさしきあたりの也

## 第四 馬験之事

一御馬験ハ大将に随て備るなり。然る上りの心得に。そだちまがきるの儀大事也。但心得への軍とて大将旗本の時。或ハ敵をうしろぐふ時。表裏のことあるれハ大将も又旗本も人数も

不虞なく。ハ斥候をつかハし備くあるべし。此時大将たるものとおもへバ敵おそれなど。味方の働ありとも。奉行眼をくばらぬべし。心得よく成べし。或ハ敵裏の軍に不意敵引色に乱にくるまなる味方の気に乗る時など下知する人。又ハ弱のなまりあるべし。するまじくハ。大将よりあまれバとてもなんとそはむるひるまいるする事なし大に行し貴る也。御馬印をとりえまハ。味方引とらんとバ。敵気よのり。息を続るを負るかるめしるものなし大将傍るを出させむとする勝語る事。扨ハかまれ也。縦ハ出る陣不意ともかもゐとく思ふへうら。総の虎のうちはよきまう。又旗付も大将のしるしとなく働すきハ。大にぶんをぬへし。感怯なく時ハ。下知人

或ハ兵法まぎり。或ハ騎射武者など有時の働をなさるべき人。證拠に立べし。稼の誉なり。過なる鑓くとおかんしかるべし。次第をきるとし。新頭を越てるよ手付んとまもるるハ者ろるべし

## 第五　歩頭之事

一　歩頭ハ。物見便番の役たるべし。此先前ハまちまちとよくして不具。飽よ歩者を頭するべし（六ツ寸）一又物見其二依其三夜討のむろ怒あるべし。又或ハ五あるかかりせん掛。の三ハ。或ハろの不及所をもり自由の働いささよし。されバ歩の荒と云者歩手二六人とこれまそ。一方強み數城を役付ておもしろためし也

## 第六　竊盗頭之事

一　竊盗乃役。敵の大事ある也。又竊盗入て陣所城を破る

す。古今に多く敵に對し奥にゐるもとたりにあらくかゝんへ用ひあへし。又頭すゝんの志ハ先城に火をつける。或ハ敵の求乃まちぶくへの通路をうけ出し或ハ内通之所の案内。或は味方のものゝ手引をいたし。蟠をとるゝ者あるのびの役する。作しあるときも乃おつもとし。裏ぶんかるゝは役に立さるりのなり

第七　武者奉行軍者可ㇾ合ㇾ心事

一　武者奉行軍者と合て作法を吟味すべし。或時ハ敵手をしり。或時は旗本へ近付ず。敵の仕寄。味方の御備を見えず。縁引し。備定る者あるへの古戦の案をまもり。先を旗本の旗に相合てハあらかんかの。是又同前

第八　鳴物之事

一　貝太鼓ふり鳴ハ。拍子をそろへて受べし。進べきまどを引田揃て人数乃足ふるまひ拍子の合ハ鳴物の恥辱なるへし

第九　陣取心得之事

一　陣取る人へ。一のしらぶん陣する時ハ。必乱やすし。将中后の備作法。前に次に是をよく味路へし。掛隔割として小よき評定利をとくきまへ。諸備の作法をよく定。将の陣をしり。或ハ陣衆の時目をちらへ立。決身をよく定。諸人に重さする乃機。陣下のまざるへし。總猶ゑんりの先をいさめ。早く敵を是をきめ。陣中行。大将又利よくふさき機に和路を。もと路のよく。左ハ右に氣を新と心を路と。ふ定との

三ツあり。惰ハ氣を新とハ同昨日乃軍ニ勝利を得て。今迄とれ勝ふ時も。其迄をまんじ勝さんと。今日犯すのふの勝乃内ニもあやうき事あることあるべく。是をすてゝ新ニする也。後ロ敵色くのまゝことをする時。前ニどのまかりとんで。二の座うする僉を好ミておりひ。さきこくにしてむかへて。新ニ遷(?)するなり。時ニ随ひまゝと今日日ニ新氣あるより。術を好何と惡念と重さる曲さ是ハ新と云字を云なり。此條又ニ面くにする大將。必定ニまける事也。或ハ明るき兵法あるべくもあり。今ある趣るべどのとし給。動ゆ行時ニも心を慮んで。惟ニ作出さるゝ云葉なれども。其のうらへ合るとさを不定と云也。此是

んと浅くハ戦法あれども。さを。足下ニてに進むらるゝ其實を味知ず。本心の敵とする惡心を攻るく。唯好みあり給。されバ惡心ニてんをせめ給ふ。攻と書なり。攻ハ責ごと成時南苑卭ニ依臆病なる待て勇なるまつひ給ふるハ。大將の恥なり。傷る者ハ子まらねバも有無し。愚將弱將の兵法なるべし。忌べき臣の恥なり。不覺なるハみづからねもさへぞ云べく。其樣を分別あるべし

### 第十羽武者心得之事

一羽武者の志ハ。才ニ一方ニ命を軽ずる事甚一術。兵法を破るあれ人の謗ニあふとも。進る仕方之へし。あとへハおのれにふ合ぬる敵もなくさぎ。用ニ立べき者なりと沙汰せらるゝ事僅の也。古人云。養守則見外あり。必さぎをあら

まひはくを待るゝかれ。志まゝ使くわゝハ。不働ともこゝ忠孝ハおろそかなるへし。さぢすら大将より雑兵にいたるまで。浮ちや不働ハ恥なり。或ハぬけがけ。一番鑓。一番首。陣取。組討。分捕を心懸て。身命をおしまず。武者の手柄或ハいのちを捨。粉骨の働といひ。自身の誉わすれても忠をさきとハ武士とハ申されども。たとへバ菊池七郎が。云甲斐なき仕合なり。是下将の意と貞則。作り勇者とも恥なり。是根本をまもる使なり。熊谷次郎道心を起し。又別に志ありや。義貞云ふ弟の武士身命を重とするハ恥なり。大身いくさに身を捨ざるハ恥なりと云り。又正成云。将として居を不思居ねどもかまさるハ恥なり。ねんして。ふ弁物居とうく意志とく不

分限之恥也と古人の詞あるハ。義経をも知時ハさとられ也しかいまし。兆置なくら

第十一 立分別之事

一手段ところみて。分野の儀ハ大利を得る也。惣て細かくも此のあやまちをしらさるハ。不審のこ川とのなりゆきハ喜みる事し。それ城中にも落て八浅々敷りの也

第十二 貪首沙汰之事

一 働のなきものハとかく。貪首ひろひ首もせんとて其仕方さへ油まもりとてれハ。誉の道を逸へし。又偽く偽ニよるなきわるさされハ親子兄弟にもまむにゆるさんてありて妻師後ととき。なくめたりとわるきとものなり。他名字席も志す

やう正しく。ことくに人乃わかきとおよきの事よの文学をあらそい。あやふ

き事色のまよひハ。論ずる事なり。又悪をすすむるものハ稽古をすすめ八偽りなり。又

くとくの理の実を似てまぎらはしき讒賊をバさるまでくよ。佞をさしく進者

言偽をバ不知と。南北の両和赦令をもとへいるよ

川くと忘乃をさの書のするものなり

## 第十三　無功者之事

一 さうまうさういの人ハ。数度出合たる老武者よく知る事あり。

常に出て武者ぶりよき武者ぶりのまねをするも。敵ハまづ軍をなし

総目付法をよく度々見えしハ。何時も戦場にてハ数のかいたる

されハ。此人ハよきにん気をもち何時にても我ま陣にすべし。将来にも

て常の軍法の是とえみせられたるものハ。或時戦場に出る

已すくの時よりまつたく欲しらぬれハ。老武者ハ老武者だてを見て

りせぐ也。総て敵なきうちにまたたてまつ難をすめる。死をさけ

しる武者よくいとなみ出る。此時味方よりわかれいべき足場なきよ

き武者ハ武者をすめる。いとく言きくそれ人へき不行意の

首捕よ。いつも討やもえとゆんとなる也。老武者も急がき不

すりと八思ひてる。常にかい詞をいふる此是をやめて急

なをいへども。ここを八足場あしく。案内をしてさがる不覚なれ

武者うけ太刀をもすまし働くなとしてい。さすが心得ある人なり

なきえん。去てそのしく戦ひえても。徒者も若ものハたが

つねの若武者かいくれたる時も武者をもすてめかくして敵を

討取らんとし武者ぶりを見てし。あさハ。戦時としてんぜくべ

其おほく後くるゝの儀ハ、一旦端わしきの者。敵をころさんよ
せんの道。又ハ武者を戮せよ。敵の首引とらんとするさ
まく名誉功者ハ餌に飼事なりと。功者の書にもありとかや

## 第十　勇者之事

一或人武道の功者をたのまれ、名ハ我一子と家の鑓乃伝
よ着し中也して、度々の軍にまさりなるに、只初かゝりことをあつかひするを
人よりまめなる儀。備に已力をもちいるを是ハ見あらん
し。命を惜名を重するを本へ、後へ必随するの儀あり
なん人まかけ後悔さん。是に二つび面をおもてるの儀
をすとるのむ。楝子の門に出る時。文緯の守を大切に濟時。
子よおもへく云必こゝまをそふにけるをとみするとくふこ

もの忠道さらんにハせんかうんといへその子是を取て三度戴き懐
中しても後文に曰く。兵戦愽にをひて其の早きハん
乃乱るゝにハあらずとも人にをそれらるなり。只勇力にいのしとさり
古の詞にて、いつまでもかはらじ。是を悟せしところ侍定まるの
君に不具の文そのまれするとへ武者を立附文に向く云
必言をまてしすまでて。是を恨むるなりけれとも。織に知事やうさ云
華也。故合戦の書に浪人のをせきの宰中によし彼武者を
みとしふ致しするハ其文武ちんをとりて。悠へることなふ
時も同之。乃時も是仕方のことくするものなり。微雖知問謹
惣じて然るに彼武者功あるによる。ときに敵一人をも云ごとく
押。後の為に首を立まてとくく。それにまさりけるわ。此時彼

武者の云。此方子に横死の首を大将乃御目にかけらるゝをと云。子さいハく。此方我を捨給ふや。又父ハいづく此方をすてく味方に行べきや。されバ敵父のいひける言葉をハそむき給ふやと云。此儀に恥て二人ながら討死す。大将の御前にて此首を論じく云。若武者ハ若武者の花なりと云。老武者ハ乃たゞごとならずと云。此時大将老武者に向て云るハ何ぞ人の為する首を持来るやと云。老武者の云く。是ハ今義此儀に出し時。道のくしめなきやと父に尋ければ彼武者手引にて我父と子のまれなる。是にぞ有けるされバ父の儀を背也とふ浮でめでたき色とて戦場の雲細に語りける。大将大に悦く曰。色々の事ハ不覚に

まわ。海ぞのさらに今あらわ諸人へよきなく。指物をさくこらへて。其紋に餘情と云二字を付よくあり。近くとにいぞほとめてさき。信青也我伴乃中より異に味方へ来入れんや。かやうによくかゝり兄気給ふ

第十 父子首を論ずる事

一 さる大将の下に。父子乃論あり。ある時乃軍に。親子ともに出陣仕ける。敵の中に赤地のさし物に。黒餅を付たる者あり。出合ところ。敵に八人ばかり立引にハ陣拷せしていさぎよく働きけれバ敵味方とも只黒餅とぞ申人是を目につけける。大将も此者のことを聞けるが其子是を取て武者

を討捕ん事をはかり。せり合すでに始らんとす。味方
いまだすゝまんともせざるさきに。ふたゝびたゞ。敵道さしあたる。すで
の毒のうけに野伏をもつて。時節をうかゞひまちたり。すで
に合戦をはじまり。追換追返しぬる時。まへのごとく。数度
味方に入ざるんさずして引なれば。横合に鑓をいれ
多く縦に引かくまさんで首をとり。大音あげて名乗
る時引こまる敵。是をしるべきに。あまたやく返して大勢にて来る
に追縫る所に。是をおしのべて。山ぎはのうら堀の
中に差込。すでにうちまはる所に。敵是をしらずしていりくる
ところを能に。たゞひとへに人数をあげて。味方へ首討死
の命敵あたへて。少し又家子の行くるのまゝ退さるの者。敵を

て多勢に引ふ乃事一命をも合せく引けたりしに。はかりてしかば
よ多あひさらず。汝いくよしくらゐく問。子こゝろく云。我
黒餅をんなりて討。味方にまさりて法のよし者をうら
て。法かさに大勢ちらに追れども。根本をうらへ
おもひ法にふくこゝろのびく。死せのまゝ追るまじく
時父が云。其首かんせよとて。指あげて是を見んする
是をうばひそれ。あるをせて大将の御前に来。我
討捕之よりと云。大将感不斜。子も取うく彼穴よ
思とものかゝる乃御前に来しつゝ。彼黒餅の首の实
徳みぞ存ける。云。首八是討捕之と申。ゐ
子に向て大にいかりて云。汝討捕ぞ

汝捐棄せさるべしと云。子驚て其事の子細を問時父涙をながして曰。我。是命此ふわることおほき事なく乃ち世に居らばなる仕方を諸人に見する事叶ず恥をさらしたる也。是他の事にあらず汝を二縁に思ひてさす子なるとて不便なりとおもひけれハ私の未練也。是かくて獨居に敵ありと不思。勝とても勝と不思。負る時ハさる事なれハいふる。父の後を見て背。根本に随けめるり。此猿子も不思。父とおもふべからざりしとこそ。大ね聞て曰。父ハ勇剛なり。子ハ勇なる功あらざる。是老翁の志相應なるべし。父子のよくあるハ小勇なる子。子父のことまハあまりあるなり。父ハ是なるは堪忍

背きがたし。子ハ父に實をつくしむべしと和げて他の所に莫金三枚を父子に見せをさづけて是ハなり。敵をうけ率将軍に可備物なれと。弟是を縁こそこのを次の日父子ハ書て。又父に云く今度の敷の働により。敵味方に驚る星條を討捕事、是不慮也。殊其忠孝の働。其志をもと父が後。更ふ見首をうばひてまに捨首を放ぬのまゝんとす汝。父と思へともゆかる事見ハ忠孝て恥あるハ然とも父ハ實を知る世人勝るとも。縱ハ汝ハ石を捨て志父ハ

りくまりあるくせらぐくなわところ。将に右指揮をなく
せよとの詞に笑ふ勇士に勝つといふ事。詞色のべくさき道

第十六　あとづけの徳ある事なり、

一士人のことは働くとしくとも、敵やみへ有る者あるくと
討捕たり。然るに此首を味方にうばひされ浦備
て、又談乃驚きに、功を奪はる人、大将の御の下に、討捕
たる也。食議するに、やさしく我人御望をもて此首を見
て、討捕たる首なり。此静骨に働よしく此首を討捕
つまるる所に、何者とてもとも、我らしき後り働まで
是を奪はれども、大将其働の始終を聞て大に賞し
我人おのれどもと、ろかしかも、重宝のちからひとの、ある
子細は彼我人の働きる遠所にありて、敵の首尾をよ
く見てる故也。然れども我人の云。其首の甲を脱せ
まよとて是をぬがせたるに、たゞ左の耳半分きれてぞく
を怒る。其時懐中より其くけを取出す。是によりて始
まづ識にある武者のしし　其時又大将の曰、所謂何とて
敵をいふ。敵に遠事一二町もあれ、座し、味方に遠事六七町
も有べし。大将聞之此食議なるべし。ときく。当座に
感情ありて不堪、褒美にも不被及、僅に深き志

第十七　我身に恐れ怒りを捕へるる事

一字の人、軍に臨みてかいりも身に及ぶをとを
無念になりぬ。此程に為過て、敵を先まで後が所の寸

ごりの數多所にて負ひたるゝ甲付の首ひつさげく。此人は馳むかひ其名をなのり進でかゝる。我これを見知りぬ。彼が若年のときより。武者不知これをさゑされたるも主人の重恩をまもり。総督殿の重恩に叶ひられたるよりも。其のちは何と申人に隠られ。依て何が故ぞ戦しく害にいたるやと忘れ兼てところ事もなくいへども。我此軍に法をやぶらざる子細は。余年久しく人は已に飢に及ぶに付て。吉き鞍具足ども沽却してむさびる大刀をのこし。屋しのさのしきる也。然るに乱世に鎗を負。勇者無二の男なりは我戦場にて捨べき命をおしむとなされ。八方家の好

敷。孫交先手をあらそふる所に。此人にはやはやくへせしなり。要所に昨日仕寄をつくらしむ。敵のかよふようにしつらひふ。是又籠城の武にあらざる。天運のあしきなり。是時節ならば敵の中に駈入ん事を思ふといへども。未弓矢炮のせりあひのうちにて近戦なり。我等は御といへども。敵に落ずとも負せん。云甲斐なく討るゝはと思ひて迄時を移しぬ也。今朝の合戦。時の運と成。法をやぶるに似たりといへども。臨時の会をもちひさんかな。討死をとぐる。俵の中を逃ぬく。此までのわざなくへども。郎等のあさましさや。同じく戦んとする者もあるべし。負さるを見たと。當一刀づゝ敵に落て疵を負せべし。

敵将川に逃付着もするされども。かせぎあさむきうらむ敵あやまたんか我に近よりきたらずして戦ひを討留也。扨只ひとりにてまて。かせぐといへども敵一人も見えず。城に在籠て。鬼道具そびしくけしる白。川をへだてなりとあらしといへども。若者ともよろひを脱て。汝が捕る首を見に代てあらんよりハ。此上ハん得ることく誉れて又のすべしとのくに。味方八必討死すべし。此分は此所にて我云甲冑をくらべたる也。味方よりかはるがはる事。其首を八方ろの一々ぎうりよの面々といひなきて。得ることくの者武者さすがの人なりければ此首を大将乃御前に進物すべくきと戦ともの戦にもありたるどといへどもかせぶとる事なり

大なる忠をいたしたりと云。大将是を聞て子細をとひ給へバ。汝が捕る首ハ何者ぞと問給へバ。此首の名をも不存。働も見ざる事也。是ハ人の捕るを貰たる也。是を貰たる者の勇。此上にハ大方ならぬ忠をあらはす事ハ古今にも勝たり。言不及事也。されどもかやうなる生付にさりの陰の下にある事ハ。其の勇なりける故也。是を又付出したるハ忠儀盛なりとやと云。大将宣ける。事の子細を問給へバ若者共云。我私事の急なるまゝに同く御前をとふ覚えまらへ。彼者をめして。吟味あるへしと云。大将かのひとの働を不審に思召されて白洲までよせられ。陣下に作て。是をとゝせ給へて。此男の云く。

首を捕る儀ハなし。数多手負あるによりて討死の時。此若武者の働を人見たり也。其陣撲乃さなかにとゞまりて おのれを語らず。ふくしつけられし。其時若武者の心がけを 働の段を後證人とおもひて。是によつてこれハ前後を覚 なり。月影みえざりて後證する事なしと云。其一言を以。大将見 を深く思召のゆへに。此若武者の事ハいよいよ。此者にあるべく ありておわり。敵父の為に乃戦に参りておわらるれども。 君のためにハ。是可信儀也。然其後の意を其身にあひて。 人に知らしく。此者によりへ申也。早く此者へ後へ此者 の捕たる首をば申さるとて。其あまり遠く候。 此者と称しけれども。忠にハへからし。此者明

討死すべきところの若年勝負。戦場にハ味方一人もなくも 也。敵千騎万騎が中にもかけいりて。此者いかなるものにの 。是をものの後悔やといひて。此儀によりて。戦場の様子 よき志あるの子細を述給ふ。大将ハ感ありける。さてこれに ろくをあたへ。感状を下し。若年なるも感状あり。奥 なる若年ハ。諸家の侍大将ハあつかるとぞ也 右文乃物語ハ。諸家乃侍大将ハ具にて其奥儀をのす 者也。家にハ其法の心にも得。惣別軍法を志ん と志人ハ。其儀を深くよりしたがふべし。此事を心得 ん事ぞかし。君の為に義の儀。忘れ絶えんして よく儀也と心得たまへかし。詫を見ての可謹と誠

あしハ。ちごゑうくあくんば仰するものなり。必本
乱て末を治事あるべし。纔ハ浅く深くよりあらはる
むしして。弱くふかきをしりめんとせハ。無綱渕をのぞく
がことし。無様欲をふるまへ。あやまり眼をもつて古
人の詞に迷ふ事が其集示も又衆さるとハ云つ。僧
之曰。不見容。不驚。不進。不念と有り。纔に愚事ある
ときのハまゝゆるすまじきといへり。又云切者之書。
侍用集。諸家評定にも弱げなくうるべし

## 第十八　うけ軍之事

一うけ軍ハこちひきくまの気機を以。多分ハ勝ことを見
るとなり。前に多くとりても。根之丈夫ん。心得あるべし

## 第十九　留主居心懸之事

一留主居ハ國の境目。又ハ大臣を志川ひかるせん懸
けなり。肝要なるべし

## 第二十　首實撿之次第之事

一首實撿之儀。大方を去るとなり。首實撿の時。大
將ハ床机に腰をかけ。物具して。太刀をとく縁げ。左の
同庇そて見るべし。軍扇を持るべし。左右に弓又矢をそへ
め。太刀をぬきさゝげ。鑓をたつべし。合戦初神あるべ
し。一首を出陣の時ハ。左扇の者よりも見ん事もあるべし。
遊ある首ハ。百より多くわくる時も有。百の内ハ二つ。あて
を下見るべし。首實撿過て。勝凱歌を作るべし時

大將腰あてすへしいくさあるときハ其の盔より諸軍怖
をもて大將なりしくハ盔に合すへし。是ハ是をもて。此をいふなり口傳

第二十一　ち使ハるゝ事

一 切て捕る首をまつるにハとむ。ちまつりとハ九万八
千の軍神にむかひ。まつり合て南無摩利支尊天を
勧めたてまつり。一切九万八千の軍の此神。今首の人ハ
の下。偏に武運高名し甚妙也。若武運長久を祈り
。また引の手にむかひ。四天王の八鬼をうち合九魔王神に
そなへまつりて。味方の勝利。我身の武運長久とぞ
ねんじ急々如律令といのるへし　此破軍にむかふ亀のし

第二十二　ヒ首のこと

---

一 首大將の不淨首といへとも。しかるわかる時ハ大將によりて八力〔illegible〕
也。此頸ハ成ものを附け。首の髪をさきまげて二ツに結ひ。木槿
の楊枝をけづりて。これの髪のまげにさしはさみて。頸白き衣
をて。これにてよわつてを包。手足をそむかずむすびて面をつゝむなり
頸を持人。弓をむかへ。弓を重ねて急此首也。此縁の主君。表
九字をきり。軍扇を胄にそへ。たゝきて〔illegible〕
さるへし。此の秘事目

そのうへ我かたにけそへる時を
おかひんまれおびうらんけん
と三遍となへ。右の手の大指ひとさしにて。三度
あそばされなり。但敵の大將なりとも此頸をうちまいらせて八幡

然ハ大方ハ法ハ無用に候なり

## 第二十三　面を飾首の事　付リ首洗ふ

一大将實検の首ハ。敵乃大将。勇臣の首なれバ。多くハ法縁なるにも。敵名ある首をハ面を飾べし。或ハ冠を傍けさせ。やうじをつくろひまゐるの事。鬢をも結へし。くしをねりさみず首の験をちぎて。やうじかむくあがをけぐむまゐるよしわる宮く式まへ出すわざ。つけさせする時也。此ふうじにてつけさせ。うくをゆふれいも。水ごきをせぬするゆへに常に八幡にせる時ハ。弓持土下知すべく。法りきさほに行へきべし。首あらふるハ。下乃者よりも洗ひ初る也

## 第二十四　子細ある首の事

一子細ある首を片目ふさぐ時。討捕たる人。弓を持へてなかりせバ。片目ふさぐる也。弦のまゝを大将のまゝにあるなり。さなくハ袖をへだてゝ片目をふさぐる事もあるべく候也。陣中懇別。侍乃首ひらきたる事ハあり。眼をむきたる力ん出し。舌をも出し。すさまじき死すれバ其の首をも。片目ふさぐるなり。用捨あるべし。

## 第二十五　首片目にかけやうの事

一首片目にかけやうの事。髭のまゝそ頭を左右に甚をくへて。左の脇にかいこみ。いかにも左かくとあゆミよりて。大将に二三尺ほどへだてゝ。右の膝をつき。左のひざを立て。右の方を卒度三度ほど見せ申して退くなり

こゝろ得るなり

第二十六　首もち人物の事

一 首もち人物の事に六くさやう。中ハ足拵。下ハこゝろけにすへし。何も切目にもちへ。切目の方乃ふちを右方ちゝ刺第一のかまけにハ。角の方へかけくもちゆる也。又首の左乃眼にハ。鉤手を当く三度引をけしやうをなとさ也。又実検乃人。門のさいを当く刀くへし。野陣なとにてハ弓を当く刀る也。弦を大将の方へなすへし

第二十七　験ある首の事

一 旌首母衣武者首弐ハ大将の首。物頭なとたるへし。ある首にハいれ刀まても甲道具を添らへ。法肩にかけ

によらけ事なし。刀を鞘へいれまても。出頭にもちゆるなり

といふなり

第二十八　母衣武者首討捕る時の事

一 幌かけ武者首討捕てハ。幌の三番乃ことねを結て四寸に折包へし。実検の時。四重にわくると三重首にしそ一重にかけ三度けしやうをすへし。母衣武者の首。幌にてハまきさるなり。実検に出也。是を首ちんひといふなり

第二十九　敵の具足大将の法肩にかけるなり

一 討捕る敵の具足を主人へ法肩にかけくるは具足のうち縫の方。左の角をかんせ也。それより見なり

第三十　敵の弓法目に縁振るなり

一敵の弓手へ比目よりけ乗ハ。丸弦をたつし。本結を主人の左へむすびかけて。弦の方を比目へふくる也此時も主人の左の方より鉄比目る也

第二十一　敵の圍旋比目にかけやうの事

一敵の圍旋主人へ比目よりけるハ。敵退去のくに得そ主人左の方よりわ。圍旋の横を比目よりけ行也。なをき人の方へ身するわ。剱の刃切先。矢の根の方。圍旋のさき。大将の方へ向る事。嬉からん得へし

第二十二　敵の幕旗取る時の事

一敵の幕簇旗なとを取てハ。丑寅の方の結よ納る也。又旗なとを。大将比絶んすへきとある時ハ。横手に左へ川し。比目よりけ無也。敵のさし物なとも。横手に一方を掛結ふへし旗と同し。惣ての敵の道具ハ皆。弦の方刃の角まで。大将の左の肩尻まで比結んあるへし。弦横手ある物ハ皆刃よりける比目より無旗とハさかさまにするもの也。凶

第三十三　討捕たる敵の死骸を送る事

一敵の首級の人へ討捕て死骸。敵へかへさるる時ハ首乃切口を小袖にてつゝみへし。又首を入るものなくハ。桶に入る時ハ。桶の廻りに経文を書なり。首の面を方のとあの方にむけてせよ。経文もとどめよりかきはじめてのうちまでも。

迷放之文と書上の名書ハ讒首雑討捕ゐ悉しく也まじくへし。因乃字数同前

## 第三十四　首請取渡之事

一敵方へ首をもち時の使者乃作法ハ。先首を請取人の方へむかひ立て。口上を申渡す時ハ。使者の右の方乃ひざよりさがりて手すれどのけて。首桶を置なり。太刀折紙の目録と同前なり。口上を申て。我中もちへ桶を引よせ蓋をあけ。首を見せ候。後とも首を渡すこしかる時ハ後にそむきひなわかさ上書に出之候。何八。桶を我方の方へさしく。一礼して退出。敵主人へ言上す。首此首を見んするとハ。ひ結うとハ云事ハ一人。面を合せるを云

---

。此時ハ首桶を主人の左乃ひざ通二尺余引て下座にて看経下乃首ふたを取。又主人より其の首て一尺すゝみ。中ハ三尺引さんに下る。扨首実検と申首を渡せ信長老人乃役なり。ふたをとりのけ首の面を向むきさまを見せ。扨首実検ハ後事後ハ信長公役也

## 第三十五　首桶寸方之事

一首桶之寸ハ高さ壱尺二寸。但二尺八寸。板ハ厚九枚二分にて縄をく。押ふち。高さ厚さ両方にわり則右にて金物かねをすなり

## 第三十六　首台之寸方之事

一首台之物寸方八寸四方也。中にて首の釘を打くさびて五寸四方にて足の高さ一寸也。足打の足の高さ一寸二分なり

第三十七　首捨る方之事

一首をすつるには。天之時の破軍には捨ざる也。敵より我友の方へ捨也

第三十八　首に札付様之事

一首に札付様は男ならば左の鬢に付。鬢をつき通すべし。遁世入道はかしら耳に付べし。札にはことをよく付置札の表に捺寸を書付也。或説に。敵乃大将の首には右の鬢に付と云。さて其首は真の名乗を書。中を八寸ほど書。下へ仮名を書と云説もあるべし。陣代の首ならば札付て又桶に入べし。ふたに名をも書也。桶のめぐりに経文を書も有。書付も仮名を下のふたにも有べし

第三十九　首帳書様之事

一首帳書様は年号月日時迄を書。首は取様其事と書。太刀めき之注文之事

天正九年七月五日　江北合戦於越国境目討捕首

御馬廻

首一　名字官　名字官討捕之　太刀下

首一　名字官　名字同討捕之　鑓下

首一　名字官　名字官生捕之

何がし一手之衆

首一名字　名字官討捕之　鑓下

首一名字　名字官　名字官　相討　太刀下

何がし一手之衆

首一　名字官　誰〻向敵ハ討捕之

首一　名字官　誰〻同勤ハ討捕之

右何人ゟ何人生捕。手負追討ニ首数と書て。此何と云字ハ数をしるべしとなり。いかほども。幾を云に。とゞくの少なき事也。但一陣二軍三陣と云もあり。是ハ討手の出也。又一番の一乃字を上へ色鑓へもらいしを至手心持ある〻口傳

第卅　味方過去帳書様

味方の討死とのするをハ過去帳と云。誰ハ大事の也

天正九年七月五日巳刻合戦於越国境同

討死之過去帳

---

名字官　敵討取其死

名字官　敵組死

名字官　敵戦死

名字官　先懸ニ死

名字官　是ト組死

（此誰と云ハ不知名字官也。誰と云不知を書也。忘れたる敵とあひたゝかひ也）

右何れも一手にての事。須く同前。此敵と書心也。敵の名字官忘れたるハ名字を可書。又かけげなるハ進出たる働ありて書のと御し。或ハ一番鑓さきがけあるべし。鐵炮弓なとにあたり死たる者ハしの時ハたゞ討死とばかり書べし。仕業なきハ

ところ〳〵うたれたるハ様子を書。然ハ内仕者有とも有へし

第四十一　手負之帳書様之事

一手負之帳　年号月付ハ前ニ有る也。右同前也。是を吟味

深手負と云事を書也

名字官　名字官と戦の時甲の眉ヨリ胸板太刀疵二
ケ所雖レ欲二切終一討二捕之一

名字官　大勢懸合小手付是入下二ケ所太刀疵

名字官　馬上之戦敵二騎ニ懸合草摺上疵腰当
之太刀疵二ケ所

名字官　敵一人組留首捕之時後ゟ廻有敵逆板尻
鑓付捨刀之疵二ケ所然敵と云不知敵乃

名字の知れざるハ其人し太刀何組之とも敵ニ生捕
首帳も一紙ニ書べし。味方の手負と討死ハ別紙ニ
書也。死人ハ帳へし。然あまた手負あらハ何
ケ所と出也。別して疵ハ様子具ニ書のする也

第四十二　敵のある陣場に附してあり

一敵乃首とらんとせしまを陣場とあらそひ鎧をくれし
て陣門ふかけ。御おもて三度是を書する也
向ふ無陣門也。此時ハ自身首を引出。左の前へ置
つう我入てきうけくる。首の面乃先を。大将ひらまるよ
て陣場へ直し。捌川廻せとある時。又三度すさらせて
扇の要川廻然目也。委く口伝。又手ありて我のみ

となりふすあらハ先塩にて口を洗ひ濯ぎて文字を繰乃葉に書きて歯にて噛 馬せ馬せ念虫噫噫 是を草木の葉に書て食すアもよし。常に人を咬馬にもあたへて心和ぐ也。先敵よりうたるゝをのがるゝ日ハ我所レ伝神符なり。是又時尾髪が切らるゝ也。抑家へとるに付時ハ。或ハ百二十日。或ハ八十五貫二百。或ハ百二千。在人によりわかちて是を定むる代乃んずて。神すまわるゝを也。諸て家の世の大方こ家の事の世。其一敵の為にのゝしと思ふ。合戦かさ時よめく世あくるのらをたつるは其一世をし上る太この と合人へもとりてへも見たてりの為にも敵方へけそとしんざくみたりハ。ひよめくとも。縄をさし

---

てのるとのなり

第四十三　感状書様の事

一 大将人に感状をつかはさる時。文章大事なるべし。或ハ非報し働。或ハ用を驚。或ハ神妙。或ハ苦労。或ハ手柄と働と忠と武功と志と又忠と志ありて軽忘と併と。或ハ奇特と奇代。或ハ敵と取と下知と手引と手勢と備と。かほよこさと書様にんじ。かお走い。或ハ怪懐。又ハ欺危し。武士ハかの首尾にて。危ふく鳴深くに一毛大山の喩ありてとるべし。能く味ふべし

第四十四　軍中にて大将より地戸振の事

一 敵を討捕ては。陣すくとも。先陣際の待あるべし。又

武士大将に組しても有るまじ。出陣の時ハ大将の右乃まへ寄りて有るべし。開陣にハ廻りに行て有るべし。心得べし

第五　敵味方云詞遣之事

一敵とハ何行も詞にて凶害云。味方と従ふを云と云。武者詞ニ云。味方とハ我のミならずと云。又敵をハ備にむかふと云。味方と備ぞこなふと云べし

第六　武者心だて之事

無嗜武辺ハ信ずることなかれ。いかにもよき首とる家の働きなりとも不意に仕たる也。必大勇乃志ハなき事べし。縦ハ敵ハ我を害するのあまりさとも有ものにて語し出るとも是さ備へたし。生付たる心にてたしなミなき人ハいかすまりとも手備ありの敵とはならじ。一旦運気たるときにおひてハ臆病になりぬべし。武者ハ眼前に恥さらすべき不覚なりと。主人へ忘恩へ忠孝に成べき不文も後代の名をなくす。おしからんこき命をも。おしからぬとも早く働き候たるべし身なり。又無念の仕合なく。懐とをけまりの志小うち果べきと思ふんとも。大勇と紛る。小事に堪忍まづ。或ハ己が身をおしまざる物と欲せざるハ。侫人乃志も同じ。金銀珠玉のかざりたるらされとも。道にあらずんば不得之ハ。賢人なりと云置し。

第四十七勇をこのむ人にす

一武道を好む人は功者に近付べし。功者は一人の徳は万人の力に勝りといへり。志ある人は物なれたる人の言語を集て功者に書を名付、又は何事も武家に志あるともがら也。古人曰非生而知之者好古道を学く。新志をとりしむべし

第四十八仕寄の時圓座を持べき事

一老功者の咄せらるゝは仕寄の時又は塀をのる時は。圓座を持べし。敵より石をなげうつ時。甲の手前に是を頭にいたゞけば頭は不痛と云り。尤甲もくさしくなく、猶ことのほかよし。甲は不しめて着る也。されども敵の仕寄も不見。味方の用意もみえざる事と一人ねきせたる仕寄何方ともそれほどの事もなく不得働は見苦しきになり。武者の心がけは親子なりとも志あれとあり。されば目にみえぬ勇庭を持とあり。人々も首級を持。首を不入人はかなるべからずと云伝。是は持人の覚悟の道也

第四十九仕寄に蒙叢を着る事

具足乃上にも。蒙叢をきたるは此時のことは具足をかくるにてさるゝわ。又鉢巻具足下と着るうちといへり。されども具足をとりてもあり。くして持の時のことなれば。まさる具足の具足下ち。きは無し。下帯のむすびめうら。分かくまなく

てすそを切べし。鐙ハかろきハあしかりの也又縄ハもろく。或ハ袷のゑりをも指べし。總の刀なと。又ハ其に着する衣服以下までも。同じ色なる道具のうへにおゐて指る心得也又具足を我朋輩に捷うくるなり。出陣の時ハ痩ぎりの物なるよりもくじき物也。具足下に布うらをつけぬれハ身にはりつきてあしき也

## 第五十　指物竿之事

一指物のさほハ。芯を入て風にあたるへからずしるなりして。風にふかるゝ惑なきのためなり

## 第五十一　武具に心得ある事

一鑓の柄ハ方竹ハあしき也。よくなる物也。刀の直なるハよく鍛ひらくハぬけにくし。鞘に屏なく余附あしき也。又小手のまハりハ具足継付の時何とすなり。力もぬけにくし。又上帯手綴にハ。鎖を入べし

## 第五十二　軍士可用薬之事

一にんにくを嗅く鼻の穴にぬれて。喉にくさきぬるなりすくなり。雪中なとにても。寒き氣を防くなり。又面手足に酒を更くぬれハ。発狂毒邪をやぶるなりと也。又にんにくハいつとなくくさきなり。馬のいきされさ路にあひへからずなり

一梅乃実を紙に包。或ハ急くへき道中をゆくにも。湯漬を含べし。饑に身あやふくなりて食してとりぬく働き

も。胸ふ痛といふ。一説ニけうちしと。ゆつけおりて餓る
ときハ。こらち又御へさ日の胡雀の生血を吞ハ。息されども
或ハ人の血を吞もよろしといふ
疫瘴にハ。芝菜を腑の中に入くふべし。下第にて吉し。遍
めしとられハ暑気を不病。腹不病となる。合食なよめ
既にく後食ども八腹のすくろおそしとなり。又兵
粮菜とく合菜乃方。諸家評定にあり。此菜を
服用して御るを撰るされ八。大便稀者とそなり
多く八用への次
一遠路を行時。必足に沖をぬるべし。足丸腫るるなし
又遠路をふみ。洗足しる後水にもぬるべし

にもかうりもぬるべくかるなるよし
一野伏蟠なるに行時も。又ハ御乃おそろしきを冬な
らも。手足に酒をぬるべし。其のこゞゆるを防ぐ
也。又戦場ニて八水に行ゆる事多し。其人
の六鏤の前輪をもち首によく。水とへくべし。又酒
をへく持ちるまとし。酒八のどのかはきを止むる。又
人を追懸時。先手にもぬるをおる。手拭をとるを
能く持まるなり。鎮又紅粉深の手拭八中なるを
世。又深田へ入る人に水を早くあてへぬれむ。則時に
死ぬことあり。又城あくるの時。人馬の小便を飲
む。これもなけれバ。くさけもあつまるりのく。又水

縮をもちたにて。未練を完るのミ一段まけハこゝろくの
こゝろゆるみしたる也。又一二万人ありといへども。地に本を崇
ても々に。鼓の筒あるのあるごとく此書ある所ハ不逆
し。又そこの所草生まる所をしるへし

## 第五十二　川渡深浅之事

一川を渡るにハ人よりハ川上を渡る人ハ下　似猿猴の
渡時ハ川下浅きもの也。又馬にて渡る時ハ深き川。
流はやき所にてハ下をみへうとも急瀬なるへく
頭をあげよ。早瀬深く川へ入る乃頭を上げ
入る深き川。急なるを受けくより口縄

## 第五十三　馬いさをしる時之事

一馬いさみをしてゐる時。舌さきを。我手一よりをぶら垂らく。汗
或ハ小刀にても立。舌中より血をとれハ忽に活也

## 第五十四　忍びを忍び入る時之事

一忍びを入るとて。ちやまり近べりけ或ハくち
まり。或ハひしまれきハまきこみ所よ行へわ。むさひ
の苑といへし。又ハ不浮進して。縁よ思案しくるふ
ワ。あんくまさこれ也　懸別臣り拙。火事ある
ちに人もんよりけ。けけぐの時にいりて人依る
ハ力んくくさりの世。少依もち来て。働するハい
さらうし。又火事在の時も。ぶんなにけく家さる
あ是嫌おし宗。又先第にてきまりし来く

縁に及。偏留んともれハ。太死するといへども又是のくふ
うなわちよ縁しつゝもず。只おそくの分別大事也又
籠城る時ハにさんげしさるゝあるゝ。人よりおそくけ
はくるハ。沖乃ぶ心無に力んゆるもの也。ん乃ちへ
し。只出立を作法も人なみにして。敵のぬらん
でうようしとおもひ給ふ無し

第五十六　失事に附る事

一失事ハ時ハ。風上に付るべし。あちら失するのて
柄かまれなる次。但大将なと。風下ハあるべし。先ん
ま立ふさがりふせぐ無し。近ころよのなとの時ハ。人
うかすさかくる居べし。是鏡家論術る時も。人かす
方よりふく鬼ぶり内へ入無し。鏡ふる者。人多き方を
用心すべきもの也。若又内より取出る時も。人かずさまへ
出るものなりにて得たく。あまりおそし。あるも初時た。
あまりに所きらへにべつべからず。内より走出る時切て
川さとのなら。定ならまし心を付。又一室ある縁なと
乃るで逃く居へつゞく。垣うらかつ遣さるるものな
。又兆道ある掲なるとさいよハんあるべし

第五十七　寝巻うらんやうの事

一ひうけなる人ハ。寝巻乃小袖うちかりてよ役をはけ
てきるくなすら。被なと縁よる出事さらもとこそて
。ほんれのうらを着て出てあるゝ見ん。くるしく。又力んも

国文学研究資料館
175091
平成23年3月25日

くる者也。それそれと思ふ者あるの後え。又其絶よりは家の常級を不付。力脈指なとも。ゆらんと人乃足きらぬ者也。たゞなとめるより捨る也

## 第五十八　陣小屋圍ひぬる事

一陣小屋かこひ又ハうハぶきなとも。たゞ紙ハあまたる器量時。馬くるひて悪し。又風吹時。物音やくさる也

## 第五十九　鏡を可持事

一陣屋へハ鏡持るべき也。必合戦なとへきおりてハ。日々よくかほをみるべし。たしなむ躰なり。又ハ我面の色をしるべき也。て。見ぐるしきを直す。又ち武者の見れるぞ。物のまへハ我面ハすく。紅粉をぬりてよろしき也。かよく人も病氣うそも。武者の面青きハ物おにゝくゝハ見ぐるしきことにハこの徳も。必我顔を見るに紅をさす。ふるき候也

## 第六十　夜の眠の事

一陣所にてハ。夜ハ人ゝのまもりなどをして。昼ハ者乃用心なき時分なり。必夜ハふくれなるて眠をさゆめ事ハ敵たり。事あるをとめぬためなるべし。或ハ宴夜の夜衣をかすくしく。昼ハ夜の数をいとてず。我身をいくらくとらるへし。されども蘇秦ハ為学錐を股に刺とかや。誠其志ハ同かるへし

侍用集巻第三終

The « Gunpô Jiyôshû » is a japanese collection from 1664, gathering various warrior traditions of the time, in 12 books.
You will find here all of the complete 12 books.

Here is the 12 books index :

Book 1 : Questions and answers about bravery.

Book 2 : About preparation to battles. (First part)

Book 3 : About preparation to battles. (Second part)

Book 4 : About preparation to battles. (Third part)

Book 5 : About the weapons and the tools.

Book 6 : About shinobi / ninja. (First part)

Book 7 : About shinobi / ninja. (Second part)

Book 8 : About shinobi / ninja. (Third part)

Book 9 :About lucky and unlucky day, time and direction. (First part)

Book 10 : About lucky and unlucky day, time and direction. (Second part)

Book 11 : About lucky and unlucky day, time and direction. (Third part)

Book 12 : About *ki* (*chi* or *qi*).

For information, these 12 books of the « Gunpô Jiyôshû » have been fully published and translated in modern japanese in a single book, during the year 2001, by the japanese publisher Perikansha :

https://www.amazon.co.jp/%E6%88%A6%E5%9B%BD%E6%AD%A6%E5%A3%AB%E3%81%AE%E5%BF%83%E5%BE%97%E2%80%95%E3%80%8E%E8%BB%8D%E6%B3%95%E4%BE%8D%E7%94%A8%E9%9B%86%E3%80%8F%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6-%E5%8F%A4%E5%B7%9D-%E5%93%B2%E5%8F%B2/dp/483150971X

Auteur : Ogasawara Sakuun (小笠原　昨雲)
Titre en langue originale : « 軍法　侍用集 »
Titre en japonais : « Gunpô Jiyôshû »
Titre en français : « Recueil des techniques guerrières des samouraïs »
Titre en anglais : « The collected way of the samurai military arts »
Année : 1664

Le « Gunpô Jiyôshû » est un recueil japonais datant de 1664, compilant diverses traditions guerrières de l'époque en 12 cahiers.
Vous trouverez ici l'intégralité de ces 12 cahiers.

En voici le sommaire :

Cahier 1 : Dialogue sur la bravoure.

Cahier 2 : Sur la préparation aux batailles. (Première partie)

Cahier 3 : Sur la préparation aux batailles. (Deuxième partie)

Cahier 4 : Sur la préparation aux batailles. (Troisième partie)

Cahier 5 : Sur les armes et les outils.

Cahier 6 : Sur les ninja. (Première partie)

Cahier 7 : Sur les ninja. (Deuxième partie)

Cahier 8 : Sur les ninja. (Troisième partie)

Cahier 9 : Sur l'astrologie et la divination traditionnelles (jours, heures et directions favorables ou défavorables). (Première partie)

Cahier 10 : Sur l'astrologie et la divination traditionnelles (jours, heures et directions favorables ou défavorables). (Deuxième partie)

Cahier 11 : Sur l'astrologie et la divination traditionnelles (jours, heures et directions favorables ou défavorables). (Troisième partie)

Cahier 12 : Sur les manifestations de l'énergie vitale (le *ki*, *qi* ou *chi*)

Pour mémoire, ces 12 cahiers du « Gunpô Jiyôshû » ont été intégralement retranscrits et publiés en japonais moderne en un seul livre, en 2001, par les éditions japonaises Perikansha :

https://www.amazon.co.jp/%E6%88%A6%E5%9B%BD%E6%AD%A6%E5%A3%AB%E3%81%AE%E5%BF%83%E5%BE%97%E2%80%95%E3%80%8E%E8%BB%8D%E6%B3%95%E4%BE%8D%E7%94%A8%E9%9B%86%E3%80%8F%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6-%E5%8F%A4%E5%B7%9D-%E5%93%B2%E5%8F%B2/dp/483150971X